

## 俵万智の変わらなき 黒岩剛仁

角川「短歌」での俵万智特集なので、読まれた方が多いと思うが、同誌の昨年十二月号では、「総力特集 俵万智 『サラダ記念日』から四半世紀——その真価に迫る」が組まれていた。正直に言うくと、私は、「今、また俵さんなんだな」と思いながらペー지를めくった（俵さん、ゴメン）。

しかしながら、松村由利子が聞き手を務めたインタビュー他、とても有意義なものであった。インタビューの話題の前半は、都内地震に遭った俵が、数日後に仙台に辿り着き、息子を連れて再び山形空港経由で沖繩に避難するまでが、時系列で語られており、読者を引き込む。とは言うものの、私がより注目したのは、やはり後半の短歌との関わりについて述べられた部分であり、俵万智という歌人が、短歌を作り始めた三十年近く前から、ほとんどその本質を変えていないことに、驚嘆の念すら覚えたのである。いくつかの発言を引く。

- ① 直接体験していないから詠んじやダメということではなくて、思うところがあればことばにすべきだと思う。（中略）百年後、二百年後から見れば、その日に日本にいたということだけでもすごい体験をしたというか、立ち会つてると言えると思うんです。
- ② だれも見ている風景は、だれも見ているから価値がないの

ではなくて、だれも見ている風景やだれもが味わっている感情にことばを与えることでみんなが共有できると思うんです。③ だれかの代わりというよりも自分自身です。でも「世界にたった一人の私」ではなくて、「世界のどこにでもいる私」のことばで私は書いていきたい。

④ 自分自身の歌の姿勢として、失恋の歌はさておいて、出来事にプラスの面とマイナスの面があったら、私はプラスのほうを受け止めて生きていきたい。

どうだろう。震災詠についての見解である①には、全く同感である（昨年七月号の時評で私の考え方を記した）し、②③④には、俵さんて、知り合った頃から変わらないな、ブレないな、と思う。特に、④。短歌の作り手たちは、物事の裏の面を見がちであり、その作品には、マイナスの感情が馴染みやすいように思う。しかし、俵流は違うのだ。性格的にも、怒ったことのない俵は、物事のプラスの面を見て歌にする。自らインタビューでも指摘しているように、子育てと相性がいい所以でもある。

特集の冒頭に発表されている新作三十首から、沖繩における新生活の感慨が読み取れる歌を。

- ・ダンボールから衣装ケースに移すとき「定住」という言葉を思う
- ・万緑の「パンナ公園」島人は「人工的などころ」と言えり
- ・九十を越えねば「天寿」と記されぬ沖繩タイムス死亡広告
- ・同い年の女に四人の孫あるを聞きつつ飲みり島の泡盛
- ・沖繩のヒーロー琉神マブヤーは敵を倒さず「許す」と言えり